

まなかの庭

私は小さい頃から自分の家の庭が好きだった。そんなに大きな庭ではないが、家の大きさに比べると、ずいぶん大きな面積だった。

母が園芸好きで、食べられるものもいくつか植えてあったし、入り組んだ形で庭石が置いてあったり、季節ごとの花が咲く木も植えてあった。だからその庭にはいろいろな顔があった。

7 まなかの庭

そしてその小さな世界には私がかつろげる場所もいくつもあった。私はそこを大切に思い、子供の時は服のまま地面にすわったり寝転んだりしていた。やがて大人になってからはきちんと敷物を敷いて飲み物を持って、ひまさえあればすわっていた。なにもしないですぐ飽きないね、と母や父や裕志ひろしは言うが、私はほんとうに飽くことなく、大きい

空を見ては、足元のこげや蟻を見、また空を見ると雲の位置や空の色が変わっている、というように少しずつ変わっていく世界を眺めて、しばらくすると今度は自分の手に光が当たっているのを眺める、という感じで、時間がどんどん過ぎていくのがこわいくらいだった。

あまりにも長年ずつと同じ眺めなので、私はそこにいると自分がいくつなのかわからなくなる時があった。大きな庭石にもたれてすわり、やはり交互に空や、大ぶりの枝や葉を見上げ、その後に蟻や小石や土を見る。そうすると、自分の大ききまでもがわからなくなつて、嬉しくなつた。たまに母が買物に出たり、父が早く帰宅したりして、庭にいる私を見つける。私が晴れている日に部屋の中にいるのが嫌いなことを、両親は映像で知っている。晴れた日は、私はもはや庭の一部だ。当然のことのようにあいさつをして、二人は門をくぐる。

裕志がやってくることもある。裕志は門からやってくることはない。竹垣を乗り越えてくる。裕志は目が悪いので、いつも目を細めてかげんな顔で私を確認する。私は笑う。裕志も笑う。その笑顔には、二人が出会つてからの、子供から大人にいたる全ての歴史が刻み込まれている。長い間同じことをしていると、そこに妙な深みが生まれることがある。

一人の笑顔はまさにそういうものだった。今さら他の新しくすばらしいことがあるとは思いつかないくらい深い交流が一瞬、横切る。

そういう時、私はほんとうに壁も天井もない所にいると思う。私たちは、時間の流れを含めた全てに見捨てられて、この世に二人きりで目を合わせている。音楽が聴こえるような、草の甘い匂いがしてくるような気がする。感覚だけが、魂だけが生き生きと、この壁のない世界で、空が大きく広がっている下で、向き合う。年齢も性別もなく、孤独な感じがするが、広々している。

どこにしようか、なにかふと不安を感じた時、心の中でいつの間にか私は庭にいる時の自分に戻っていくことがある。庭は、私の感覚が発した地点、永遠に変わらない基準の空間だ。



MAYA
HAZE
1934